

# 認知と認識（赤と緑）のお話

「人が感覚として認知しているものが、他人と全く同じ感覚として認知しているかどうか（認知の一致）は、可視化できないし、誰にも分らないから証明できない。」

認知とは：「外界にある対象を知覚することや、なんらかの五感による気づき」

認識とは：「外界から得たそれらの情報（認知）が意味づけされた上で意識され、何らかの分類に振り分けされたもの」と解釈し、この頁における定義とする。

やはり、認知の数値化や可視化は無理であるような気がするし、認識の表現も十人十色・千差万別。Aさんが”赤”と認知し”赤”と認識したものが、Bさんには”緑”と認知され”赤”と認識される可能性は否定できないし、証明は不可能であると確信した。

四半世紀くらい前から（正確な日時等は不明）主に人との会話（認識の摺合せや共感を得る）の中で、漠然とこの人とは頭の中（意識）が本当に一致しているのだろうか、たとえば認識（意識）が一致したとしても、本当に認知レベルで同一と感じているのかが、どうも気になってしょうがなかった。ただ、認知が違っていても認識（意識）が一致していれば、会話は成立するし共感も得られるので、支障はないし、不都合はなかった。

それから十数年後、NHKのラジオ番組で著名な哲学の教授が偶然にも「赤と緑」の例を挙げて、認知と認識について「認知の時点では、どのように感じているかを本人以外には理解できないが、会話等を通じて認識レベルでは理解し合える」の主旨で説明されていた。「人の認知が自分と一致しているか分からない」が結論であると自信を持った。

先日、冷凍庫の中のととてもよく冷えた金属製の器に触れた瞬間、思わず「熱っ」と口走ってしまった自分に気付いた。幸い近くに誰もいなかったので全く何の影響もないのであるが、冷たいと認知しているはずであるべきその表現が「熱っ」となってしまったのは、何か良からぬ病気の症状の一つなのか、誰にも見られたり、聞かれなかったことを幸いに放置することとした。生活には全く支障はないし、他人様に迷惑もかけていないはず。当然、医療機関の世話には至っていない。それでも、一抹の不安はある。もう平均寿命を残すところ約4分の1に至る現在、加齢による一般的な他者との認知の相違が徐々に増加してもおかしくはない。川岸に近づいているのは事実だが、その相違がよく分らない。

最近、条件反射由来の「お金の味」なる味覚の新しい認識に気付いた。人が持ちえる味に対する認知を問答無用に上塗りする認識（表現）である。それが全て良い（美味しい）認識であれば幸いなのだが、残念ながらその逆も相当ある。悪いことに、どうやらそれが一つではなく、多くの食品に蔓延していることが目についてならない。本来の美味しさ、美味しさの本質とかけ離れた意識付けによって、多くの認知が歪められている。

2015/9/11公開 鮭のネタ・刺のネタ(Vol.1)の内容を改訂